

「芸術科合同授業の研究と実践」

昭和56年度

音楽科	遠藤	正之
美術科	白木	博也
工芸科	佐野	清
工芸科	阿部	守
書道科	計良	裕佳

「芸術科合同授業の研究と実践」

昭和 56 年度

音楽科	遠藤正之
美術科	白木博也
工芸科	佐野清
工芸科	阿部守
書道科	計良裕佳

〔56年度合同授業実施内容〕

◎前書き

芸術科の合同授業も、本年で6年目を迎えた。51年よりはじまったこの合同授業も、6年目に於いて本格性を帯びた実践を開始したと云ってよい。手さぐりから出発したこの授業実践も、次第に四教科の教官の熱意と努力により、精神的行動にも、ようやく一致点を見いだすに至ったの感がある。回を重ねるにしたがい、その焦点も定まり、テーマの面でも、思はず全員が一致した考えになることもあり、合同授業の一つの側面、つまり、四教科教官の人間の融和も、大らかに焦点が定まりつつある。

◎準備段階

本年度のテーマは、昨年、一昨年のテーマに関連を持たず、広く内容を模索した。テーマの大きな目的としては、先づ第一に、生徒がとびつくような魅力的なものでなければならないことがあげられる。次に、資料がしっかりしており、我々の研究のテーマとしても、十分に重みのあるものが考えられた。一学期の末から、何回かの討議を重ねていった結果、次の四つのテーマが各教官から提示された。

- 「社会の変革と芸術」
- 「宗教と芸術」(日本の仏教を築いた人々)
- 「文明開化時代の芸術」
- 「芸術の良し悪し」(価値)

上記について、一学期以降、数回にわたって協議を重ねたが、主に次のような意見がのべられた。

「宗教と芸術」については、芸術と宗教は切っても切れない強い絆によって結びつけられているが、宗教的な深い知識がないと理解できない面を含めて、この題材を表立ってテーマにする場合は、教官の準備段階でも、生徒の理解を得る点についても、かなりの困難さをまぬがれないという結論に達し、これは中止ということになった。

又、「芸術の良し悪し」(価値)については、教官の中でも、主観的な要素の強いテーマなので、

果して生徒に対し、決定的な結論を提示できるかどうかの疑問があり、このテーマも没になった。

「社会の変革と芸術」のテーマは、社会が変化するにしたがって、芸術が変化していくという芸術が持つ宿命というか、必然をテーマにしたもので、生徒に対しても、説得力があり、高2の生徒には、恰好のテーマであるとの考えに達した。しかし、四教科とも、その変革した時代がまちまちでは、合同授業の効果が半減するので、「文明開化の芸術」と連ねるような形にし、時代を「文明開化」、つまり、桃山時代から江戸時代にかけての、社会の変革と芸術についての合同授業ということに決めた。正確に言えば、室町末期、種ヶ島にポルトガルの難波船が漂着し、ヨーロッパ文化が日本に入った時期から、ヨーロッパとの貿易が盛んになった開港の時期、後、鎖国に至る時期などを通じた、桃山時代から江戸時代にかけての時期の文化についてである。

ヨーロッパ文化によってゆれ動いた日本の文化状況を生徒に知らせ、文化は、社会の影響・変化によって、全く異質のものにメタモルフォーズするありさま、異文化による日本文化の変化、又、変化しても日本的要素を少しも失わない文化等々、について生徒達の認識を新たにさせるのが主な目的である。

すでに日本の文化は、中国や朝鮮の影響下に発達したものであり、主に中国文化の変化をすばやくとらえ、発展してきたものであるが、ヨーロッパ文化が入って来たのは、種ヶ島がはじめてであり、その影響は、中国文化の移入に勝るとも劣らない効果を発揮した。

殊に美術については、絵画史上空前といわれる、遠近法・明暗法の移入が当時の人々を驚ろかせた点は、今日我々が想像のみで考えても、言語に絶するものであったであろう。又、工芸における素材や題材の多様性、音楽における異なった楽器の輸入等があげられる。

かくして、合同授業のテーマは、「社会の変革と芸術」(文明開化の時代)と一応決定された。

「社会の変革と芸術」(文明開化の時代)が一学期に決定以来、夏期休暇中に、四教科の教官は、独自にこのテーマに関する資料集めに努力を重ね、二学期になって、それら資料を持ち寄り深く協議を重ねた。その結果として、各教科についての具体的な目安の設定が行なわれた。

テーマはそのまましたが、サブタイトルは各教科ごとに決定する事として削除された。その折、各教科より出された時代背景及指導内容は次の通りである。

○音楽科

明治に入ってから移入された洋楽の変遷を通じて考えて見ると、上野に音楽学校が設置されて後は、学校教育における洋楽の影響は大きく、はじめに和と洋を折衷して、この点で苦しんだが、後に至って和を落とし、洋のものだけになった。そして洋式のメロディーが民衆に及ぶような傾向がはじまった。これが、滝廉太郎と山田簞笥の出現によって、一気に一般的なものになった。又、大正・昭和の初期に至って、童謡運動が起き、これらが合わさる形で今日の歌曲が生れた。

昭和10年代から軍国主義に向うと共に、西洋が排斥されて、沈滞の状態がつづき、邦楽と共に能楽等も盛んになった。又、宮城道雄などにより、洋と和を融合させる運動も盛んであった。(例えば「春の海」)

戦後は、国際的にも立派な作曲家が多く出、日本人的感觉で西洋音楽を演じつつ、今日の音楽

形式ができた。

・美術科

洋風の美術については、三つの期間に分類することができる。

- ・第1期 天文12年(1543年)～宝永5年(1708年)これは、渡来期ともいえるもので、室町時代後期、ポルトガル人が種ヶ島に漂着した時期から、江戸中期に至るまでをいう。
- ・第2期 宝永6年(1709年)～慶応3年(1867年)制作期ともいえる時期で、新井白石が「西洋紀聞」をあらわす時期から、江戸時代の末までをいう。
- ・第3期 明治元年(1868年)～明治末(1911年)この時期は、近代洋画期ともいえる時期で、近代の洋画の基礎が確立した時期である。

第1期では、ポルトガル人がもたらした洋風画が、南蛮趣味の形で、大名や豪商の好みにかない、輸入原画の写しや、その組合せを変えた作品が多く描かれた。

第2期では、平賀源内が長崎遊学中に油絵の知識を得、今まで日本では考えられなかった、陰影法・明暗法や遠近法による技法も修得した。

この考えを受けついだのが、小田野直武等による秋田蘭画で、後の司馬江漢は、小田野の弟子である。司馬江漢によって、日本の洋画はその第一歩を踏み出したとってよく、亜欧堂田善が出て、銅版画の分野ではじめて日本人の作品を生んだ。

第3期は、フォンタネージ(イタリア人)の来朝や、黒田清輝の外光派の導入で、日本の洋画の基礎は確立するが、授業では、第2期を中心として行う旨、方針がのべられた。

・工芸科

江戸末期から明治初期にかけての工芸材料の変化、機械技術の発達、生活様式の変化などが先づあげられる。これらにかかわって、工芸分野での180度の変遷等を、陶芸・染織・金属加工等にしぼり、授業していく方針がのべられた。この時期(江戸末期～明治初期)に、上流階級に抱えられていた職人が没落していき、非常に生活に困った状態になった。明治になって、パリやウィーンで開催された万国博覧会などにそなえて、国がこれらの人々を技法等で助けるような形を取った為、昔とちがった技術・技法をともなった今日の工芸技法の発展を見るが、その反面、当時の矛盾をそのまま、今日まで引きつづけている点も事実である。

・書道科

江戸時代後期は、和様と唐様の折衷の時代が続いていたが、明治になると、はっきりと唐様になった。その契機となったのが楊守敬の来日である。彼は1万点を超える中国の書を将来し、大規模な中国書道の形が、ここに紹介された。又、それと同時に、六朝の書が入り、その他の古典書も入った。そして、この時代は唐様が全盛を極めたが、国粹派により、上代仮名も又普及した。大正時代に入ると、洋風のものすべての和風を圧倒し、書道も冷遇されるようになり、小学校では毛筆が廃止された。

昭和になると、(軍国主義に関連があるかも知れないが)すべての書道が復興された。

◎指導案の決定

指導案の概要についての話し合いを煮つめて、最終的に指導案の決定を見た。次に四教科の指導案について、①指導の観点 ②本時の目標 ③学習の指導過程を記してみよう。

○音楽科 サブテーマ「明治以降の音楽」

① 指導の観点

江戸時代から明治時代への大きな社会変革の中で、日本における音楽がどのような影響を受け、以降、現代までの間にどのように変っていったかを、その時々時代相と照らしながら観ていく。その中から、社会の変化と芸術の変化が無縁でないことを、音楽に与えられた影響から感じさせる。

② 本時の目標

- ・明治維新が物心両面において、日本の音楽界にどのような変化をもたらしたか、或いは、もたらす芽を持ち、どのような方向付けをしていったかをみる。
- ・大正3年の第一次世界大戦から、第二次世界大戦終了時までの日本の音楽は、ほぼ洋楽一色に塗られていた。そうした中で、邦楽界から、宮城道雄を中心とした新しい試みが成果をあげたが、これらの様子を見る。
- ・第二次大戦後、経済と共に音楽も目ざましい発展、充実をみせた。又、洋楽と邦楽の双方から真の創作的な新しい音楽の模索があり、成果をあげたが、それらを見て見る。

③ 学習の指導過程

- ・導入 プリントで、江戸時代から明治時代迄の音楽状況をみる。
- ・展開 明治維新が音楽界にもたらしたものとして……外国の文化や、思想が日本の音楽界にどのような影響を与えていったかを知らせる。

① 洋楽の輸入について。

② 明治の教育のあり様、唱歌等について。

③ 邦楽界の様子

④ 演歌の発生と変化について。

これらを、唱歌「うさぎ」(明治25年)「野菊」(昭和17年)演歌「オッペケ節」によってきかせる。

大正時代から第二次世界大戦終了時にかけての音楽界として……外国音楽の直輸入、欧歌の時代にどのような音楽の動きがあったか。

① 童謡運動「赤い鳥」

② 浅草オペラ

③ 「新日本音楽」の活動

④ 流行歌の盛況

⑤ 軍歌について

参考曲として、童謡「カナリヤ」(大正7年)オペラ「ボッカチョ」(大正4年)より、「恋はやさし、野辺の花よ」、新日本音楽「春の海」(昭和4年)二種類の演奏。流行歌「カチュ

「マーシャの歌」(大正3年)、軍歌「空の神兵」(昭和17年)をレコードできく。

第二次大戦終了後にどんな音楽が生れたか……。

- ① アメリカ音楽の氾濫
- ② 歌声運動
- ③ 流行歌と一億総歌手時代
- ④ 伝統音楽と洋楽との結合

参考曲として、伝統と洋楽「ノヴェンバーステップ」(尺八と弦楽合奏、打楽器のための協奏)をレコードできく。

結びとして、社会と民衆と音楽と、そして、社会の変化と音楽の変化は無縁ではないとの確認。

○美術科 サブテーマ「日本の洋風画」

① 指導の観点

我が国は古来から、印度・中国を中心とする大陸文化の影響を深く受けていた。しかし、室町時代末期、種ヶ島にポルトガル人が漂着して以来、西欧の文化がはじめて日本の土を踏んだ。特に桃山時代から江戸時代にかけて、西欧文化の影響を受けた日本絵画が、如何なる変様を遂げていったかを、実例(スライドによる)をもって、生徒達に伝えることを指導の観点とした。

② 本時の目標

以下の作品をスライドによって鑑賞する。

- ・渡来作品の模写及び自由模写作品
- ・秋田蘭画(特に小田野直武を中心にした作品)
- ・江戸洋画(司馬江漢を中心とした作品)

③ 学習の指導過程

- ・導入 日本の洋風画について、第1期渡来期、第2期制作期、第3期近代洋画期について、洋風画の成立と歴史的な意味を講義する。
- ・展開 次の順序でスライド鑑賞を行う。
 - ・渡来作品……渡来作品のテーマ性を知らしめる意味で、重文「聖母像」重文「聖母子像」「悲しみの聖母」「三聖者像」
 - ・自由模写作品……渡来作品を受け入れ、日本の材料に同化していった過程として、「マリア十五玄義図」「救世主像」, 「聖ザビエル像」,
 - ・洋風屏風絵等の作品……屏風絵のように、如何にして日本化が行われていったかの点に留意するため、「世界地図屏風」, 「四都市図屏風」, 重文「レバント戦闘図」, 「二十八都市図屏風」, 「南蛮屏風」2枚, 「洋人奏楽屏風」2枚, 重文「洋人奏楽図屏風」
 - ・秋田蘭画の作品……日本の伝統を残したまま、洋風化していった好例を示すため、小田野直武「洋人調馬図」, 「富獄図」, 「鷹図」, 重文「不忍池図」, 佐竹曙山「湖山風景図」, 「松に唐鳥」, 「かきつばたとナイフ」, 「日本風景図」

- ・司馬江漢の作品……以前の日本画になかった、遠近法・明暗法を用いて、洋風画の確立を進めた例として、司馬江漢「サーペントイン池図」、「両国橋図」、「下総利根川今井渡図」、「不忍池図」、「三囲景図」、「捕鯨図」、「すず食器工場図」、「国異風景人物図」2枚、「学術論争図屏風」、「エビ和尚図」、「西洋樽造図」
- ・亜欧堂田善の作品……司馬江漢を 発展させた 例及銅版画の例として、重文「浅間山図屏風」、「両国橋」、「墨堤観桜図」、「シノハスの池図」「西洋公園図」、「大日本金竜山之図」
- ・その他の画家達の作品……それぞれの個性ある洋風日本画として、伝信方「師父二童図」「婦女弾琴図」、「日教上人像」、石川大浪「杉田玄白像」、「ファン・ロイエン模写」、石川孟高「少女愛猫図」、大久保一丘「真人図」

○工芸科 サブテーマ「明治期の工芸の変遷」

① 指導のの観点

芸術科合同授業「社会の変革と芸術」というテーマの下で、明治期を捉え、その工芸の変遷について、理解と興味を持たせるべく、授業を行う。その時期の工芸の状況を知らせることにより、今日の生徒達の生活を改めて見直す視点を与え、私たちの生活の中の工芸とは何か、`美、と `用、ということは一体どのように考えられるか、という点について、それぞれ一考させる。

② 本時の目標

- ・明治期の社会の動きと工芸の動きを対比させ、その通史を理解させる。
- ・陶器・金工を中心に、幕末の動乱と維新の変革の中で、伝統工芸がいかに打撃を受けて衰退したか、又、どのような経緯（万博・殖産興業と工芸など）で立ち直ったかを理解させる。（陶器と金工の立ち直り方の違いも含めて）
- ・西洋の影響（人物など）と技術革新（釉薬と文様・図柄など）がいかになされ、どのようにして大量生産型と、一品制作型の工芸に別れてしまったかを理解させる。
- ・明治期の `美、と `用、の相違の発生及現在への経緯を考えると共に、同時期、英国の W・モリスを中心に起った美術工芸運動と比較して検討してみる。

③ 学習の指導過程

- ・導入 「社会の変革と芸術」のテーマを工芸について解説するが、特に現在の状況の把握と `もの、の在り方を重点にあつかう。

展開 明治期の通史と工芸の動きを、年表形式のプリントで対比して解説する。幕末期と明治期の盛衰の解説として。（端的に区分して解説）

① 幕末維新の衰退状況

② ウィーンの万博への参加と殖産興業政策の中での工芸

③ 大量生産型と一品制作型への分離

- ・ドイツ人ワグネルと有田焼等の技術導入について。
- ・工芸の近代化への歪みと技巧偏重主義の弊害（デザインの意味の貧困さ）

- ・Wモリスの美術工芸運動との比較をし、「美」と「用」の在り方を問う。（同時代の英国工芸の動き）
- ・これからの工芸とは。（意識レベルの違い）

以上授業展開の中で、スライドとして、次のものを使用する。

宮川香山「上絵梅樹文花瓶」、清風与平「旭彩山桜優勝図花瓶」、加藤友太郎「玉蜀黍図花瓶」、沈寿官「薩摩焼香炉」、三浦乾也「色絵瓢形水指」、二世川島甚兵衛「草花図綴織壁掛」、川之辺一朝「螺鈿菊蒔絵棚」、鈴木長吉「鶯置物」、海野勝珉「還城楽図額」、並河靖之「四季花鳥文花瓶」、服部杏園「色絵花果实文皿」、永楽和全「色絵更紗二段重」、浅井一毫「色絵金襴手楼閣文花瓶」、竹本隼太、「辰砂花瓶」他

○ 書道科 サブタイトル「明治期における書道の変革」

① 指導の観点

明治の文明開化という社会的変革の時代に、書もまた文化の一実相として、その芸術観、価値観を変え、作品の姿は江戸期には見ることでできない様相を呈してくる。

楊守敬の来朝という一事に焦点をあてて、明治以降、現代にまで大きく影響することとなった、書道の流れの分岐点を理解させる。

② 本時の目標

- ① 現代の書道の学び方と、江戸期とのそれを比較し、古典とする対象のちがいを考える。
- ② 楊守敬の来朝によって、六朝書が紹介され、古典とする対象に変化をみせた。また、清朝の学問文化の影響により、考証学・金石学がもたらされ、それは古典を研究する姿勢を生みだし、広い古典の内に書の美を求めるといふ、書の学び方の変化をみた。
- ③ 明治期の特筆すべき書家の作品をみる。

③ 学習の指導過程

- ・導入 現代の書道の対象とする古典を考えさせる。その手はじめとして、高校「書道」の教科書の内容について考えるが、その留意点として、古典の図版の盛り込まれ方を考えさせ、書の美を広い古典の内から汲みあげる考え方に基いていることを理解させる。

- ・展開 江戸の書道について

① 寺小屋教育（庶民）……尊円流

② 唐様（一部の人々）……明代書道

プリントを見ながら、時代性について把握させるが、留意点として、古典とする対象が、現代から見ると非常に限られている点、中国の影響はあったが、一部の人々のものであり、その書も明代の帖学的書道であった点。

楊守敬の来朝が日本書道にもたらしたものを示し、明治期の書道を考えさす。

1. 楊守敬という人物
2. 六朝書道の紹介
3. 古典に基づく書の研究法

4. 仮名書道への影響

5. 専門書家の発生

留意事項として、古碑帖を多くもたらすことにより、六朝書に目を向けさせた。楷・隸書風の流行。清朝の学問文化が考証学、金石学の芽を日本に育てさせた。書の美を広く古典の内に探る姿勢を流入させた。これは師法の伝授といい、それまでの学び方に対するものである。

明治20年、国粹化の波から仮名書道の復興がなされ、平安仮名への研究的姿勢が生れる。

明治期の作家の作品を見る。清朝の金石学の影響の強い作品として、楊守敬、徐三庚、潘存、趙之謙、吳昌石、日下部鳴鶴、巖谷一六、西川春洞、中林梧竹、北方心泉、中村不折、渡辺沙鷗、比田井天来。

明治の動乱に生きた偉人、烈士の書として、副島蒼海、勝海舟、山岡鉄舟、西郷隆盛、東郷平八郎、犬養木堂。

書の東洋的性格として、西洋文明の影響で書は変わるものではなく、文字文化圏の内での変革であった。

まとめとして、文字の歴史の内に広く書の美を求める姿勢が、書道にとって必要であり、そこから書の何たるかを引き出されてくる。また、明治・大正・昭和の時代の進展に伴い書にも西欧文化の影響が入りこんできている。社会の進展のうちで、より広い見地から、書道の姿をみつめていくことが大事である。

◎四教科教官の博物館研修

前記指導案が確定した所で、合同授業実施への最後の仕上げの意味も含め、博物館研修を行なった。研修した二館の名称・所在地・研修内容は次の通りである。

・南蛮文化館（大阪市大淀区中津6～2～16）

南蛮文化館では、主に次のものについて、鑑賞し、研修した。

- ・キリタン関係遺品として、「キリスト画像」、「聖母子画像」、「聖ヤコブ画像」、「マグダラのマリア画像」、「聖アンドレ画像」等の絵画、「イエズス会紋章入聖餅箱」、「十字架蒔絵印籠」の漆芸、「十字架刻印ブドー酒瓶」等の陶磁、「秋草模様象嵌十字架」、「キリスト像聖牌」、「マリア像聖牌」、「十字架透鉄鐺」、「IHS合字象嵌鉄砲」、「キリスト受難具象嵌鏡」、「細川家九曜紋入洋鐘」等の金工、その他として、「グレゴリオ13世伝」、「日本殉教精華」、「聖アントニオ像」等。

- ・南蛮美術品としては、次の作品を鑑賞し研修した。

「西洋風俗図屏風」、「外国十二都市図屏風」、「世界地図屏風」、「洛中洛外図屏風」、「修道士読書図」等の絵画、「秋草蒔絵螺鈿洋櫃」、「草花蒔絵螺鈿洋箆筒」、「花鳥蒔絵螺鈿卓」、「松に橋、蒔絵螺鈿重箱」、「南蛮人蒔絵鞍」等の漆芸、「十字紋茶碗」、「十字紋俵型鉢」、「コップ型向付」、「うんすんカルタ模様香合」等の陶磁、「南蛮人図柄鏡」、「南蛮人図手焙」、「十字釜」、「うんすんカルタ図象嵌鏡」等の金工、その他として、「スペイン紋

章入革製硯箱」,「高山右近筆書状」,「小堀遠州筆島原之乱書状」,「鳥原の乱図巻」等。

- 神戸市立南蛮美術館（神戸市葺合区熊内町1～8～21）
南蛮美術館では、下記の作品を鑑賞し研修した。
- 南蛮美術として、重文「泰西王侯騎馬図屏風」,重文「世界地図・四都市図屏風」,「聖フランシスコ・ザビエル像」,「南蛮屏風」など。
- 紅毛美術として、平賀源内「西洋婦人図」,秋田系,江戸系,須賀川系,長崎系などの洋風画及び,司馬江漢の作品など。
- オランダ人,オランダ船などを扱った長崎版画。
- 円山応挙の眼鏡絵,洋風遠近法を誇張して用いた浮世絵版画。
- 江戸時代末期から,明治初年にかけての,横浜版画,上方版画。
- 17世紀黄檗宗の渡来とともに行われた,写實的肖像画（黄檗画像）。
- 18世紀前期,沈南蘋が長崎に渡来して以来,日本全国に流行した写生的花鳥画（沈南蘋風花鳥画）。
- 他に書道作品若干。

56年度芸術科合同授業の実施

◎テーマ「社会の変革と美術」

- サブテーマ
 - 音楽科「明治以降の音楽」
 - 美術科「日本の洋風画」
 - 工芸科「明治期の工芸の変遷」
 - 書道科「明治期における書道の変革」

◎ 実施時期 昭和56年11月24日及12月1日の5, 6時限

◎ 実施学年 高校2年全クラス

◎ 実施要領

- 音楽科は,指導案の通り,プリント資料5枚を用いて,講義とレコード鑑賞を行った。
- 美術科は,指導案の通り,講義とスライドによる鑑賞授業を行った。
- 工芸科は,指導案の通り,年表資料等のプリント3枚を用いて,講義とスライド鑑賞を行った。
- 書道科は,指導案の通り,年表資料等のプリント2枚を用いて,講義とスライド鑑賞を行った。

◎ 合同授業の反省と問題点

合同授業の前期と後期の間に一回,前・後期終了後に一回,計二回の反省会が持たれ,各教科より,次の点について,反省と問題点が提示された。

- 音楽科

- ・生徒の中には、あまり興味を示さないものも居たが、概して静かに授業をきいた。
 - ・ことに、工芸・書道の選択者の生徒が少なかったが、良くきいてくれた。
 - ・時間が足りなくて苦慮したが、時間をはしょると内容がうすまる感じだった。
 - ・テーマが3つあったが、1つのテーマだけでもよくやると1時間はかかる。
 - ・この授業では、富国強兵の力と共に西洋音楽が滲透したので、その発展のしかたが、あまりよい方向に行っていない点を強調した。
 - ・生徒から、「良い話を有難とう」といわれ、力づけられた。
- 美術科
- ・出席率が悪かったのは、時期の悪さ（例年より少しおそい）、生徒の質等によるが、出席した生徒達は良い生徒だった。
 - ・うるさい生徒が一部に居たが、概して静かにきいてくれた。
 - ・我々教官の想い入れが、生徒達のそれにならず、カラ廻りの感があった。
 - ・特に力を入れた点は、一流作品に影響されて出発しなかったのも、結局、明治になって洋風画は消滅し、新輸入の外来洋画に席をゆずった点であったが、この点は生徒の理解があったように思う。
 - ・全教科が、一つの時代にはっきりとしぼったようなテーマがよいのではないか。
- 工芸科
- ・授業の前半は話、後半はスライドだったが、うるさいクラスもあれば、静かなクラスもあって、総じては、手ごたえがない感じだった。
 - ・後期の生徒の方が、聴く態度はよかったが、欠席が多くなった。
 - ・前期の生徒にはよく話せたが、後期には言う事が無くなってしまった感じだった。時間的には丁度よかった。
 - ・工芸・書道の生徒より、美術・音楽の生徒の方がよくきいてくれた。
 - ・せっかく、くばったプリントを置き忘れていく生徒もあり、残念だった。
 - ・こちらの努力に対し、生徒の態度はそれに答えていなかったようだ。
 - ・民衆と工芸のかかわり合いにおいて変化したのであって、本質的な変化にまで至っていない流れを、生徒達によく示し得なかったのではなかったか。
- 書道科
- ・時間の前半は講義、あと20分で50枚のスライドを見せる授業だったが、おとなしくきいてくれた。
 - ・美術選択の生徒は欠席が多かったが、静かにはきいてくれた。しかし、さびしかった。
 - ・後期は調子が出ず、前期の方がやりやすかった。
 - ・まとめをしっかりと定めようとしたが、こちらの思いが生徒につたわらなかった。
 - ・大きく見ると、この時期は書道の衰退時代であり、その中での変化なので、むずかしい授業だった。

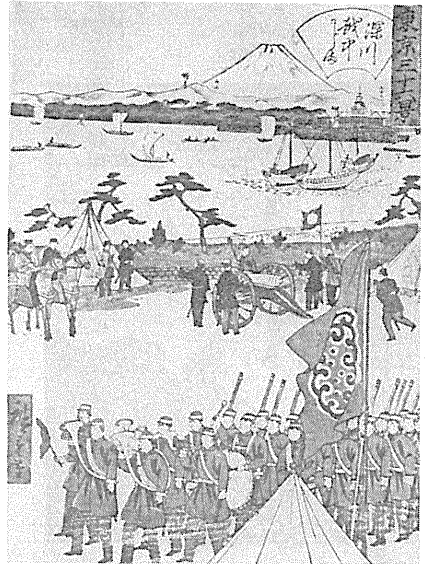
- もう少し、具体的なポイント（例えば1人の人物）を持っていた方が良いと思う。
- やはり、1時間の授業では無理ではなかったか。恐らく見終って、生徒達は物足りなかったのではなからうか。
- 総合的な反省点として、次の事項が指摘される。
 - やはり、時間が足りなかった。
 - 時期としては、文化祭等の行事にわずらはされない時期にすべきだった。
 - 4教科に共通の、それぞれの問題点が大きくあるようなテーマが望ましい。
 - 1人の人物とか、きまった時代であるとか、テーマ性が際立っているものとか、はっきりした目標が提示されたものの方がよい事が分った。
 - 生徒が飛び付くような、アクチュアルなテーマの設定。

以 上

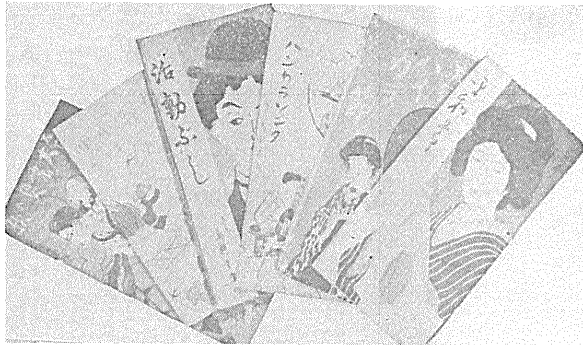
1. 参 考 図 (音楽)



②



①



④



③



⑥



⑤

- ① 東京・越中島での観兵式における軍楽隊
- ② 五線譜による唱歌演奏風景
- ③ 伊沢修二

- ④ 演歌唄本の絵表紙
- ⑤ 「海国日本魂」文楽座解説番付表紙
- ⑥ 国際民族音楽舞踊祭出演の宮城・西崎の一行

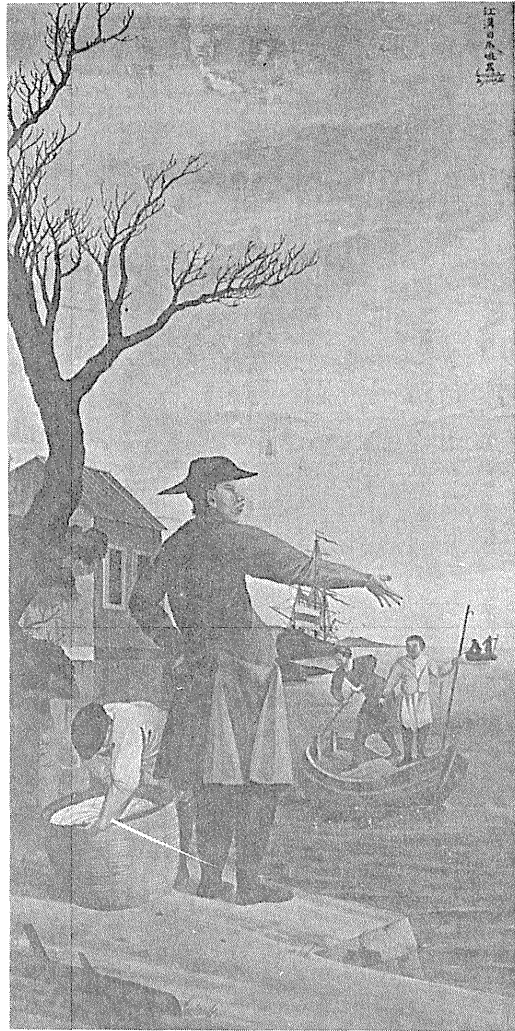
(以上 吉川英史著「日本音楽の歴史」より)

2. 参 考 図 (美術)

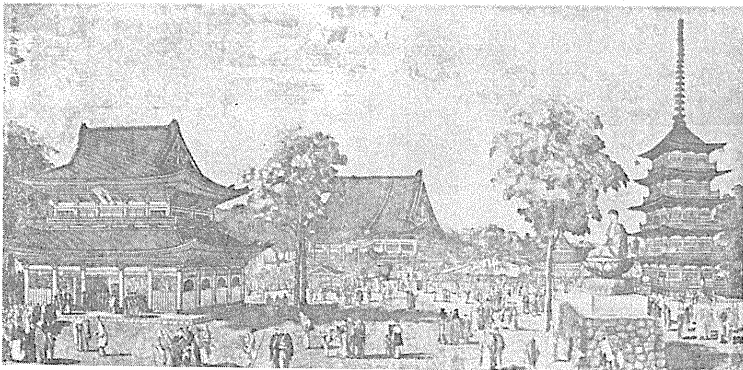


①

- ① 聖フランシスコ・サビエル画像
- ② 「異国風景人物図」司馬江漢筆
- ③ 「大日本金亀山之図（銅版画）」
亜欧堂田善筆



②



③

3. 参考 図 (工芸)



①



②



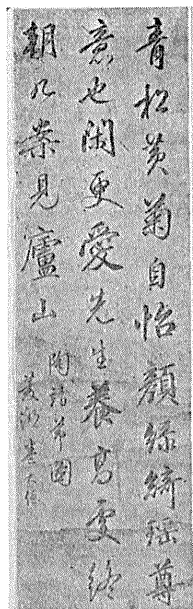
③



④

- ① 十字紋俵型水指
- ② 南蛮人獨台
- ③ 十字釜
- ④ イエズス会紋章入聖水瓶

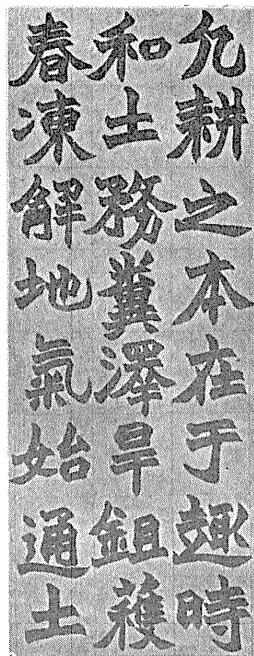
4. 参 考 図 (書道)



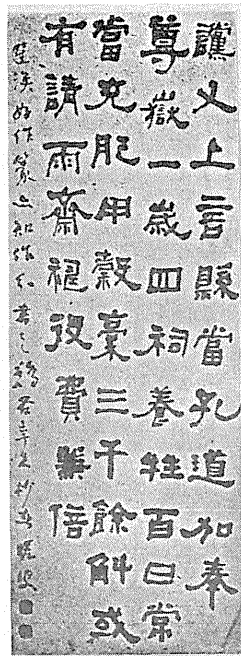
卷菱湖書(江戸)
題陶靖節図詩



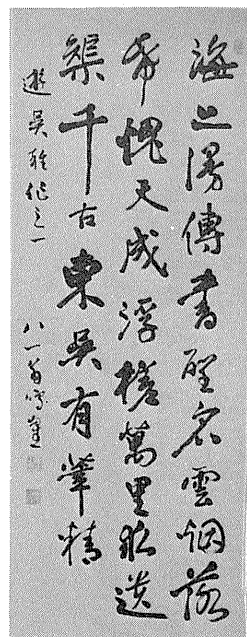
始平公造像記(北魏)



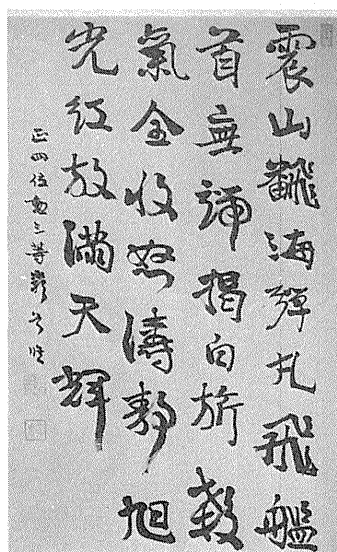
趙之謙書(清)



何紹基書(清)



日下部鳴鶴書(明治)



巖谷一六書(明治)



川谷尚亭書(大正)



中林梧竹書(明治)